ジェイルハウス＝ラブ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジェイルハウス＝ラブ

【Ｎコード】
Ｎ２９３１Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ずっと孤独で荒んだ心だった俺がふと出会った一人の天使。その天使を狙う奴を知った俺は天使の為に。チェッカーズシリーズ第三十四弾です。武内亨さんがヴォーカルでした。こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｃｏ．ｊｐ／Ｍｕｓｉｃｓｔａｒ－Ｇｕｉｔａｒ／３４５４／

第一章

ジェイルハウス＝ラブ

その時俺は深夜のアスファルトの上に立っていた。

「やっちまったか」

全てが終わった後そう呟いた。その時俺の手には一本の血塗られたナイフがあった。

今さっき人を一人殺したばかりだ。理由はある。だがそれは俺には直接関係のないことであった。

御前はそれを聞いて何故、と思っただろう。だが俺にとってはどうしてもしなくてはならないことだったのだ。

俺は薄暗い中に生まれたらしい。らしいというのは俺には親というものがいないからだ。

親父もお袋も知らない。何でもコインロッカーに捨てられていたらしい。冗談のようだが本当の話だ。俺は生まれた時から誰にも必要とされていなかったのだ。だから捨てられた。

俺は飢え死にする一歩手前でロッカーから発見されたらしい。それは運が良かったのか悪かったのか俺にはわからない。だが見つかったことを感謝したことは一度もない。

孤児院で育った。周りは大体同じだ。どいつもこいつも捨て子だった。俺もそうだ。

捨て子の中でも色々ある。育てられなかった奴もいれば俺みたいに生まれてすぐに捨てられた奴もいる。一人一人境遇は違っている。それでその違いで喧嘩になる。孤児院は荒んでいた。

いつも喧嘩ばかりしていた。貧乏な孤児院だった。食うものも碌になかった。ただそんな中で俺は教会に行っていた。理由は簡単だ。この孤児院は教会が運営するものだったからだ。年老いた神父さんがやっていた。今にも倒れそうなヨボヨボの爺さんだった。後はシスターが何人かいるだけだった。本当に何もなかった。

荒む俺達を育ててくれた。いい人達だったのだろう。だが感謝する気にはやはりなれなかった。俺はこんな世の中が嫌いで仕方がなかった。生まれてきたのが嫌で仕方がなかった。　学校でもそうだった。小学校に入っていきなり喧嘩した。それから来る日も来る日も喧嘩ばかりしていた。当然俺はいつも一人だった。

孤児院の汚いベッドに寝ていても俺は一人だった。夢はいつも喧嘩や捨てられたコインロッカーのことばかりだった。まだ目も開けちゃいねえのにはっきり覚えている。そして俺を捨てた親父やお袋を恨んだ。顔も名前も知らないが憎くて仕方がなかった。

高校まで何とか出た。高校では何度退学になりかけたらわかりゃあしねえ。それでも卒業できたのは奇跡だった。どうやら神父さんが色々と手を尽くしてくれたらしい。もう死にかけなのに御苦労なことだとしか思わなかった。

高校を出て孤児院も出た。俺は家がなくなった。だが寂しいとは思わなかった。生まれた時から俺は一人だったからだ。

すぐに町の工場で働きはじめた。安いアパートも借りた。そこで俺は勝手きままな生活をはじめた。仕事は生きる為だ。ついでに今までやった悪事を続けた。カツアゲでも何でもやった。悪いとはずっと思ってはいなかった。俺は今までこうして生きてきた。そしてずっとこうやって一人で生きていくものだと思っていた。そうしたもんだと思っていた。それが間違っているんだったら証明してみせろと思っていた。

そうした日々だった。金はあった。だがそれだけだ。汚い金だ。それで生きてきた。職場でも俺は一人だった。そしてそれは死ぬまでそうだと思っていた。少なくとも俺はそれでよかった。死ぬ時もどうせろくなもんじゃねえだろうと考えていた。俺みたいな奴にはそれが相応しいと思っていた。あの時までは。

第二章

たまたまだった。日曜暇にかまけて他所の町をぶらぶらとしていた。そしてそこでふと小さな教会の前を通りかかった。

「教会か」

俺はそれを見て一言そう呟いたのを覚えている。そこで去れば何もなかっただろう。だがこの時無意識に足が動いた。それが何故なのか今でもよくわからない。

中に入った。目の前に十字架があった。俺はそれを見た後目を下にやっていった。

「小さな教会だな」

俺はそう呟いた。何の感想もねえ。俺がいた孤児院の教会と同じ粗末な教会だった。

見ればその前に誰かがいた。女だった。

「ん！？」

それに気付いた俺はその女のところに歩いて行った。

「あんた何をしているんだい？」

跪いていた。祈りをしているのだろうか。その時ふとそう考えた。

「はい」

女は顔を上げた。何処にでもいそうな地味な顔の女だった。髪型も黒のストレートで地味だった。服もだ。何処にでもいるようなつまらない女に見えた。夜の街に行けば幾らでもいるような俺が知っている女達とは全く違っていた。

「お祈りをしています」

「祈りか」

それを聞いて俺は笑わずにいられなかった。

「こんなもんに祈ったって何にもなりゃしねえよ」

そう言って嘲笑した。

「そうでしょうか」

だが女はそれを否定した。
「私はそうは思いませんが」
「何故だい？」
俺は笑いながら問うた。
「私は今まで主の愛によって生きてこれましたから」
「神様ねえ」
俺はさらに笑わずにいられなかった。
「神様が何かしてくれるものかよ」
言いながら腹の底に怒りが溜まるのを感じていた。
「俺なんか生まれた時から感謝したことなんかねえぜ」
「そうなのでしょうか」
「当たり前だ」
俺は答えた。
「何に感謝するっていうんだよ」
「この世に生まれたことに」
女は俺にそう答えた。
「生まれたこと！？」
俺はそれを聞いて笑わずにはいられなかった。
「馬鹿言ってるんじゃねえよ」
笑うと同時に怒りがこみ上げてきた。
「何でそんなことに感謝しなくちゃいけねえんだよ」
「感謝されないのですか？」
「当たり前だ」
俺は怒気を含んだ声でそう答えた。
「あんた俺のこと何にも知らねえだろ」
「はい。御会いしたばかりですから」
「だったら教えてやるよ。俺がどうやって生まれたのかな」

第三章

そして俺は女に説明してやった。俺がコインロッカーに捨てられていたこと、そして貧しい孤児院で育てられたこと。今まで喧嘩に明け暮れ今も荒んだ生活を送っていることを。包み隠さず話してやった。

「どうだ、わかったか」

全て話し終えた後でそう言ってやった。

「甘いこと言ってるんじゃねえよ。俺はなあ、ずっと地獄にいたんだよ」

「地獄ですか」

「そうだ」

吐き捨てるように言ってやった。

「俺は地獄にいたんだよ。あんたなんかとは違うんだよ」

言う度に腹の底から怒りがこみ上げてきた。いつものことだった。その怒りがこみ上げる度に不快で仕方がない。だがそれを思わざるを得なかった。俺はそうしていつも生きてきたからだ。恨みが俺の生きる糧だった。

「私だって孤児ですよ」

だが女はそう答えた。

「父は私が生まれる前に亡くなりました。事故で」

「そうだったのか」

それは知らなかった。純粋に悪いことを言ったと反省した。

「しかしな」

だがすぐにそれがどうした、と思った。俺はそんなもんじゃなかったと言おうとした。その時だった。

「母も私を産んですぐに亡くなりました。元々身体が弱かったらしくて」

「そうか」

言い損ねた。女の話を聞いて逆に俺は黙ってしまった。
「けれどそこである方に育てて頂いたのです」
「誰にだい？」
「ここの教会の神父様にです」
「そうなのか」
それを聞いて俺と似ている、と思った。
「じゃああんたの家はこの教会か」
「はい」
女はそう答えた。
「私はここに住ませてもらっています。神父様と一緒に」
「そうか、何か俺と似てるな、本当に」
口に出してしまった。だがそれはごく自然に出てしまった。
「俺も神父さんに育てられたからな。別の教会で」
「どのような方でしたか？」
「まあいい人だったな」
そういえば特に罵られたり虐待されたということはなかった。俺だけじゃなく誰にでも公平に接してくれる温かい人だった。シスター達も同じだった。
「俺も優しくしてもらったな」
「そうでしょう？」
女はそれを聞いて嬉しそうな声をあげた。
「嬉しかったでしょう」
「まあな」
それは事実だ。渋々ながら認めた。
「育ててもらったしな」
「感謝していますか？」
「馬鹿言うな」
だがそんなことは思ったこともなかった。
「こんな世の中で育ててもらって何を感謝しろってんだ」
「何故ですか？」

「俺はなあ、生まれたくなんかなかったんだ。訳はさっき言ったな」
「それは違います」
女は俺に反論してきやがった。
「どう違うんだ！？」
売り言葉に買い言葉だ。俺はくってかかった。
「俺はなあ、いつも思ってるんだよ。生まれるんじゃなかったってな。地獄にな」
「またそんなことを」
「地獄だよ、何で俺は他の奴等と違うんだ、生まれたのが」
また怒りがこみ上げてきた。
「そして何もないところで生きてきてよ」
「何もないというのは嘘です」
ここで女はまた言いやがった。今でもはっきり覚えている。
「嘘だあ！？」
怒りがさらに高まったのを感じた。こめかみがヒクヒクしだした。
「はい、そうです」
女は俺を挑発するようにしてまた言った。
「神父様やシスター達がおられたのでしょう」
「・・・・・・ああ」
俺は憮然とした声で答えたのを覚えている。
「それはそうだがな」
「ではそこにはあったのです、何かが」
「フン」
俺はそれを聞いて全身に虫唾が走った。
「神父さん達がか」
「ええ」
女は頷いた。
「その人達が貴方の何かですよ」
「何かか」
「はい」

また答えた。
「よく考えてみて下さい。その人達が貴方に何をしてくれてきたのか」
「覚えてねえな」
「そんなことを言わずに。一度戻られてはどうですか」
「気が向けばな」
俺は嫌々ながらそう答えた。この時は戻る気には到底なれなかった。
「是非」
「わかったよ」
俺はやはり嫌々答えた。
「本当に気が向けばな。いいな」
「ええ、どうぞ」
女は微笑んだ。綺麗でもない、垢抜けない顔だがそれが俺の目に止まった。それを見て俺はふと思った。
(暇な時にでも行ってやるか、冷やかしにでもな)
シニカルにしか構えられなかった。あの爺さんや婆さん達がどれだけ耄碌しているのか見てみたくもなった。死んでいたらそれはそれで面白いと思った。その時はそう思った。

第四章

とりあえず気が向いた。俺は育った孤児院のある教会に向かった。バイクを飛ばしてそこまで向かった。

「潰れているかもな」

運転しながらそう思った。只でさえオンボロだった教会だ。お化け屋敷と呼ばれたこともある。そんな教会だから何時潰れてもおかしくはなかった。

教会の前に来た。するとまだあった。

「あったのかよ」

俺はそれを見て口の端を歪めて笑った。見れば俺がいた時よりもさらに傾いていた。

隣が孤児院だ。覗くと神父さんがいた。俺がいた頃よりさらに老け込んでいたがまだ立っていた。といっても俺がここを出てからまだ二三年しか経っていない。

ガキを相手にしていた。数人いた。どいつもこいつもまだ小学校にも入っちゃいねいだろう。丁度我が侭な頃だ。今のあの人には相手をするのは酷かも知れないと思った。

しかし神父さんはそんなガキ共の相手をにこにこと笑いながらしていた。ゆっくりとした動きでかなりしんどそうであったが、それでも笑いながら相手をしていた。

シスター達もいた。皆今にも倒れそうな様子であった。だがそれでもガキの相手をしていた。

「まだやっていたのか」

俺はそれを遠目で見ながら呟いた。

神父さん達はガキを孤児院の中に入れた。休ませる為だ。俺の時もそうだった。

それから神父さん達は孤児院や教会の中の掃除をはじめた。それから食事も作りはじめた。全部自分達でやっている。

「まずいものだったな」
不意に神父さん達の料理の味を思い出した。あんなまずいものはなかった。だが俺はひもじい思いはしたことがなかった。
それからガキ共を起こして食事になった。見ればガキ共はまるで馬か牛みたいに食っていやがる。だが神父さん達が食べるのはほんの僅かだった。今までそれに気がつかなかった。
「・・・・・・・・・」
それを見て俺は思うところがあった。口ではっきり言えないが何かが心の中に宿った。そしてその食べる光景を見終えると俺はアパートに帰った。
それから暫く考えた。俺はあの人達にどう育てられてきたか。そして俺はどうしてきたか。時間があるとそれについて考えるようになった。
時々時間を見つけて覗いてみた。やはり神父さん達はやんちゃなガキ共の世話をしている。だがあの時、俺がいた時と同じで嫌な顔一つしない。それどころかにこにことしている。
「何が嬉しいんだ」
あの時からそう思っていた。そして今もそう思っていた。
考えているうちにわからなくなってきた。次第に我慢出来なくなってきた。たまりかねた俺はあの女がいる教会に向かった。そして聞いた。返事はすぐに返ってきた。
「嬉しいからですよ」
「嬉しい！？」
「はい」
俺は首を傾げずにはいられなかった。何が嬉しいのか。全くわからない。
「あの人達にとってはそれが喜びなのです」
「喜び」
「はい。貴方も感じませんでしたか？」
「何をだ」

「あの人達の喜び。そして心を」
「心」
「はい」
女は答えた。
「きっと感じている筈です」
「・・・・・・・・・」
俺は考えた。いや、正式に言うと思い出したと言うべきか。
ガキの頃神父さんに握ってもらった手を。ガサガサでどうしようもなく荒れた手だったがあったかかった。それはシスター達も同じだった。何よりも温かい手だったのを覚えている。
「思い出されましたか」
「まあな」
「それが答えです。その方達にとってそれが最も価値のあるものなんです」
「俺もか」
「はい」
女はまたそう答えた。
「その方達にとって貴方も貴重な、かけがえのない存在である筈です」
「まさか」
否定した。当然だった。俺がそんな価値のある奴な筈がない。親にも捨てられた俺が。思わず怒鳴りたくなった。
「馬鹿を言っちゃいけねえぜ」
「私はそうは思いません」
だが女はここでまた言った。
「よろしければその神父さん達に御聞きになればいいでしょう」
「そこまでしなくても」
わかる、そう言うつもりだった。だが先手、それもより上をとられてしまった。
「わかっておられますね」

「・・・・・・ああ」
俺はそう答えざるを得なかった。そして頷いた。本当はわかっている筈だった。あの手の暖かさを思い出したその時で。もう否定できなかった。
「そういうことです。これでいいでしょう」
「まあな」
口惜しい筈だった。今までは。だがそうじゃなかった。不思議と言えば不思議だった。
「だがな」
それでも引っ掛かるものがあるのは事実だ。
「まだ完全にわかったわけでもないぜ」
「それは承知しています」
「そうなのか」
「はい。ゆっくりと考えて下さい。時間はかなりある筈です」
「わかった。それじゃあな」
俺はその場を後にすることにした。そして暫くまた考え込んだ。

第五章

それから俺は何事にも考え方が変わった。色々と見方も変わってきた。

今までは刺々しい見方ばかりであった。それが徐々にだが穏やかになってきた気がしてきた。

落ち着いてきたのだろうか。カツアゲ等もしなくなった。そうしたことから引くようになった。そしてやることも穏やかになってきた。全てが落ち着いてきたのだ。

それと共に教会に行くことも増えた。そこには女がいた。最初はうざったく感じたこの女も次第にそうは思わなくなってきた。気持ちが穏やかになってきたのを感じていた。

俺は女と色々話をするようになってきた。そして付き合うようになった。やはりそれで教会にいる時間が次第に多くなってきた。アパートにいるより教会にいる方が多い時すらあった。

俺は生まれてはじめて自分が恵まれていると思えるようになってきた。しかしそれはほんの一瞬だった。そう、本当にほんの一瞬だった。

彼女のいる教会に何やら怪しげな連中が出入りするようになった。その目や人相を見て俺はこの連中がろくな奴等じゃないと一発でわかった。

「何だ、あの連中は」

俺は彼女に尋ねた。

「不動産屋さんらしいわ」

「ふうん」

確かにそうかも知れない。だがその実態は悪徳か何かだろうと思った。

「不動産屋さんがここに何の用だ」

「何でも御祈りしたいとか。これから時々来たいと仰ってたわ」

「そうなのか」
「ええ。信心深い人達みたい」
「そうだったらいいがな」
俺はとりあえずそれに頷いた。
「何かあるの？」
「いや」
俺はそれには首を横に振って否定しておいた。
「何もねえよ」
「だったらいいけれど」
彼女には知らせることは出来ない。とりあえずは連中を見張っておくことにした。
連中はそれから言葉通りしばしば来るようになった。祈るのはいいがいつも何かを物色しているようだった。俺はそれがやけに目についた。
「盗人か？」
最初はそう考えた。
「いや、違うな」
だが目が違った。盗人にも会ってきた。連中は連中で独特の目と雰囲気を持っている。どうやらこの連中は盗人ではないようである。
では何か、俺は考えた。結論は出なかった。
こっそりと後をつけたりもした。不動産でもそこはその手の不動産だった。所謂企業舎弟というやつだ。俺はそれを見てキナ臭いものを感じずにはいられなかった。
「やっぱりな」
俺は確信した。この連中は教会を狙っている。すぐに動かなければ大変なことになると思った。
彼女にそれを伝えた。だが彼女は俺の言葉を笑って否定した。
「そんな筈がないわ」
「何故そう言えるんだ！？」
俺は彼女を見据えて問うた。

「貴方だってそうだったもの」
「俺が」
「ええ。最初は怖い顔をしていたけれど。今もね」
疑ってはいないようだ。それだけ純粋だということか。
「けれど貴方はいい人だった。あの人達だって同じよ」
「そう思うのか？」
「ええ、そうよ」
そこまで聞いて俺はやり方を変えることにした。これでは駄目だと思った。
どうするか、彼女に知られてはいけない。俺はすぐに動くことにした。陰ながらだ。こうしたことは昔から得意だ。生憎いい生き方はしちゃいない。俺は陰道に入ることにした。
どうやら奴等は教会の土地を狙っているらしい。つまり地上げ屋か。まだいるとは思わなかったがそれでもいることは事実だ。何とかしなくちゃいけないのは変わらなかった。
やっていることは法律スレスレらしい。そうしたことに詳しい奴に聞くとかなり悪質だが法には触れてはいないらしい。そして連中はいつもそうやって土地を騙し取っているらしい。
「奴等はかなり狡賢いぜ」
そいつは俺にそう耳打ちした。俺はそれを聞いて頷いた。それから言った。
「どうすりゃいい？」
「そうだな」
そいつは暫く考えてから答えた。
「法律とかじゃ連中にはどうもできねえな」
「どうしようもないか」
「法律じゃな。法には触れちゃいねえ」
「方法はないのかよ」
俺は眉を顰めさせて問うた。
「どうしようもねえのか？」

「ねえな」，ｂｒ＜　素っ気無く答えられた。
「どうしてもっていうんならバラすしかねえが」
「バラすか」
「けれどそこまでやる義理でもあんのか？ねえだろ、おめえには誰にも」
「まあな」
こいつには教会のことを教えちゃいねえ。教えるつもりもなかった。
「だったらいいじゃねえか。考える必要もねえ」
「そうだな」
その場ではそう答えた。
「御前さんは少なくとも連中とは何の関わりもねえしな」
「そう思うか」
「あるのか？」
「・・・・・・いや」
言う必要はなかった。そんなつもりもなかった。俺はそう自然に答えた。
「生憎だが連中と関わるのは御免だからな」
「わかってるさ」
俺はそう答えてその場から消えた。そしてアパートに戻った。
「バラす、か」
ふとそう呟いた。その途端心の奥底から殺意がこみ上げてきた。それが何故かわからなかった。その時は。

第六章

それ以来奴等を調べるのに躍起となった。調べているうちに聞いたことが本当だとわかってきた。法律には憎い程触れちゃいねえ。それでいてやってることはかなり悪どい。確かにバラすしか手はないように思えた。だがここで俺を止めるものがあった。

「俺一人が被るならいいが」

彼女がいた。何も知らず純粋に俺を信じてくれる彼女が。どうするべきか、流石に迷った。

ある日俺は教会に行った。そこにはやっぱり彼女がいた。俺は尋ねた。

「なあ」

「何？」

「この教会がなくなったらどうするつもりだ」

「そんなこと考えられないわ」

すぐにそう答えてきた。

「考えられねえか」

「ええ。だってこの教会は私の全てだから」

「全て、か」

「そうよ。私が育って、今いるところだから。ここがなかったら私は生きてはいけない」

「どうしてもか」

「ええ。どうしても」

彼女の声は普段のものより強かった。

「他じゃ生きていけないわ。神様もおられるし」

彼女にとって神はここにしかいないのだ。そしてそれは俺にとっても同じだった。ただ俺は教会に神様を見ていたわけじゃない。今目の前にいるこいつに見ていたのだ。

「絶対に離れたくはねえんだな」

「ええ」
声はさらに強くなった。
「どうしてもね。これだけは」
「わかった」
俺は物分りのいいふりをして頷いた。
「じゃあそこにずっといられるようにしてやるよ」
「どういうこと？」
「御前は知らなくていい」
言える筈もなかった。俺は彼女に背を向けた。
「邪魔したね」
「もう帰るの」
「ちょっと顔を見せただけだからな。あばよ」
俺はアパートに戻った。そしてその夜一人で街に出た。その手に青い稲妻を持って。
夜の街を探し回った。獲物はここにいる。直感がそう教えていた。探した。探し回った。顔は覚えている。後は見つけ出すだけだった。そして遂に見つけた。
奴等は夜道を歩いていた。灯りはなかったがはっきりとわかった。獲物の顔が。
ナイフを構えた。そして突進した。それからの記憶はない。気が着いた時には奴等は血の海の中にいた。俺の手にある青い稲妻は赤く染まっていた。向こうから赤い光とサイレンの音が聞こえてきた。俺の手に手錠がかけられた。
「さあ乗れ」
「ああ」
俺は鉄格子のある車に乗せられた。乗り、扉が閉められた時に後ろを振り返った。何処からか連絡があったのだろうか。そこには彼女がいた。
「どうした」
警官も俺が振り向いたことに気が着いた。尋ねてきた。

「何もねえ」
俺はそう答えた。
「そうか。ならいい。行くぞ」
「構わねえよ」
車は出発した。俺は監獄に向かった。
鉄格子の窓から彼女が見える。何か言いたそうだった。だがそれは俺にはもう聞こえない。それがわかったのか彼女は別の行動に出た。
「・・・・・・・・・」
右手で十字を切った。それは俺にもよく見えた。
俺は彼女に見えるように窓の前で十字を切った。それだけだった。窓に背を向ける。そして座った。それから窓は見なかった。何も言わなかった。
それでいいと思った。今でもそう思っている。愛しているとかそういった言葉は好きじゃない。そういったことがいらねえ時もある、その時わかったことだった。だが冷たい監獄から送りたい想いもある。それを今俺は御前に伝えたい。俺は戻って来る。その時まで待っていてくれ。それだけだ。

ジェイルハウス＝ラブ　　完

２００５・１・２８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2931f/

ジェイルハウス＝ラブ

2011年4月28日01時25分発行